

日本推理小説の系譜

平成5年7月27日～8月21日

八月四日は松本清張が亡くなってちょうど一年になります。清張は、トリックや謎とき中心の推理小説に対して、犯罪の動機というものを重視し、それも日常性の中に潜む犯罪動機を社会的関連性において描くことによって、それまでの日本の推理小説に欠けていたリアリティと社会性を与えることに成功しました。清張がその後の日本の推理小説に与えた影響は「清張以後」という表現にも表れていますが、今回の展示では、清張までの日本推理小説の歩みを概観してみることにしました。

展示資料リスト

<>内は当館請求記号

①^{ヨングル}楊牙児奇談

神田孝平訳、成島柳北編

<25-560>

東京 中川鉄次郎 1886 79p

神田孝平の訳した『和蘭美政録』(クリストマイエル著 『死刑彙案』からの抄訳)の中の一編を、成島柳北が添削発表したもの。探偵小説翻訳の嚆矢とされている。

②法廷の美人

黒岩涙香訳述

<特13-596>

東京 小説館, 薫志堂 1889 122p

探偵小説移入の祖と呼ばれる黒岩涙香の初翻訳。原作はヒュー・コンウェイの『暗き日々』。

③探偵淵軌：闡幽燭微

森澤徳夫著

<17-250>

東京 探偵淵軌発行所 1891 295, 52p

明治の半ばから大正にかけて流行した「探偵実話」の元祖といわれる書。著者は警視庁第二局第

一課長を長く勤めた人。

④『新青年』大正15年新年増大号 復刻版

<UM84-55>

創刊は大正9年1月号。同誌は創作推理小説のほかに外国の推理小説をさかんに翻訳紹介。松本少年もこの雑誌でビーストン、チェスタートン、クロフツなどの推理小説を愛読した。フレッチャーの少しずつものごとの真相が明らかになっていくというやり方は、清張にも影響を与えている。

⑤心理試験

江戸川乱歩著

<545-6>

東京 春陽堂 1926 311p (創作探偵小説集 第1巻)

十五六歳頃の清張が、「日本にも本格的な探偵作家が出たと驚嘆した」(『黒い手帳』)という江戸川乱歩の第一創作集。『二銭銅貨』『D坂の殺人事件』『心理試験』『二廃人』『赤い部屋』[いずれもこの作品集に収録]などが続々『新青年』誌上に]発表されて、私は夢中になった。大変な天才が現れたと思った」(同)。

⑥ドグラ・マグラ 幻魔怪奇探偵小説

夢野久作著

<665-213>

東京 松柏館書店 1935 739p

夢野久作のライフワーク。読めば一度は精神に異常をきたすといわれる奇書中の奇書。

⑦黒死館殺人事件

小栗虫太郎 (『新青年』昭和9年4月号)

<Z24-1128>

⑧網膜脈視症

木々高太郎 (『新青年』昭和9年11月号)

<Z24-1128>

「日本の探偵小説に知性を(小栗虫太郎のは雑学的粉飾であった)与えた最初の人は氏であろう」(『黒い手帳』)。清張の『週刊朝日』懸賞小説入選作「西郷札」(同誌昭和26年春季増刊号に掲載)を認め、『三田文学』に「記憶」「或る『小倉日記』伝」発表の機会を与え、清張を世に送り出したのも木々高太郎である。

⑨蝶々殺人事件

横溝正史著

<a913-306>

東京 月書房 1948 186p

『本陣殺人事件』とこれが出たことによって、戦後の推理小説界が奇跡的に生気をとり戻したといわれる。

⑩猫は知っていた

仁木悦子著

<913.6-N715n>

東京 大日本雄弁会講談社 1957 231p

第3回江戸川乱歩賞受賞作品。わが国ではじめての本格派女流推理作家の登場と歓迎された。

⑪点と線

松本清張著

<913.6-M335t>

東京 光文社 1958 234p

清張の長編第一作。雑誌『旅』に連載中は殆ど反響がなかったらしいが、これが出版されると、大きな反響を呼んだ。日本推理小説史上ひとつのエポックを画する清張の代表作。

⑫黒い画集

松本清張 第一話「遭難」最終回

<Z24-18>

『週刊朝日』昭和33年12月14日号

10月5日号から連載が開始されるや、清張ブームは決定的となる。

⑬黒い画集

松本清張著

<913.6-M335k6>

東京 光文社 1959-1960 3冊

「遭難」初出(⑫)では、犯人も雪崩に巻き込まれて死ぬことになっていたのが、単行本収録の際に、その部分は削除され、犯人は助かって、「安全で、愉しげな下山のつづきに移った」という皮肉な結末に書き換えられている。初出の方が自然で、すぐれていると思うが、どうだろうか。